「ただ、そこにいる」を
キーワードに
高校生に
福祉施設をひらいてみる？

次世代に福祉施設をひらいていくプロジェクト2025報告書

東京都社会福祉協議会

高校生が福祉を身近なものに感じるきっかけを、
他者や社会で起きていることを自分事として考えるきっかけを
東京都社会福祉協議会として生み出すことができないか。
そんな思いで2024年度から、
高校生が福祉施設に滞在するBeingThinkingTourは始まりました。

2025年度からは「次世代に福祉施設をひらいていくプロジェクト」として、
新たに２か所でBeingThinkingTourを実施するほか、
多様な関係者とツアーについて話し合う場（Beらぼ）を設け、
この企画について考え続けながら、
施設や地域に広げていくことをめざして取り組んできました。

タイパ・コスパが優先されるAI時代。
血縁や地縁は弱体化し、自分のコミュニティを超えて
多様な人と出会い、異なる考えや価値観に触れることはより難しくなってきています。
同質性の高い状態に居続けることは、自分と異なる人を許容することが難しくなり、
差別や排除、分断を加速させていくのではないでしょうか。

そんな時代だからこそ、
多様な人の“生きる”と向き合い、答えのない問いを考え続けてきた福祉施設が、
現代を生きる高校生に、届けられるものがあります。
それは他者と出会う楽しさだったり、
誰かと一緒に取り組む面白さだったり、
自分の常識やあたりまえが揺らいだり、
もやもやしながらも考え続けることの大切さだったり。
そして何より誰もが「ただ、そこにいる」だけで価値があるということだったり。

一方で、福祉施設に滞在する高校生から、
私たち大人が日々のなかで無意識に見失っていたものを、
改めて気づかせてもらう瞬間もあります。
それは福祉施設が持つ価値だったり、他者へのまっすぐな眼差しや関わりだったり。

居合わせた人それぞれが変容していく、福祉施設に滞在するBeingThinkingTour。

本冊子は、2025年度の取組みを記録した報告書であり、
また“BeingThinkingTourをやってみたい”というみなさんの一助になればと思い、
Beらぼで考えてきたことや大切だと感じたことを整理しました。

福祉施設に滞在するBeingThinkingTour

福祉施設に滞在するBeingThinkingTourとは 4
ー滞在と対話のじかん 7

BeingThinkingTour2025の記録

BeingThinkingTour 東久留米編 13
BeingThinkingTour 日野編 23

ふくひらプロジェクト推進会議(Beらぼ)

Beらぼについて 36
ーBeらぼメンバーからみたBeingThinkingTour 38

なぜ福祉施設をひらくのか

目の前にいる、たったひとりの幸せのために、
悩み、共に笑い、試行錯誤を繰り返していく。
福祉施設で営まれているそんな日々には、
人の尊厳を守り、共に暮らすための知恵や工夫が
たくさん転がっています。

それを、施設の中だけにとどめていてはもったいない。
そんな思いから、「福祉施設をひらく」ための、
さまざまな試みがスタートしました。

ひらかれた扉から、少しずつ、
外にいた人が入ってきます。
その人は、高校生であり、地域住民であり、
新たな友人となる人かもしれないし、
未来の福祉の担い手かもしれない。

出会ってみたら、そこからなにかが生まれる。
そしてその先で、私たちが生業とする福祉は、
関係者だけのものではなく、
きっとみんなのものになっていく。

次世代に福祉施設を
ひらいていくプロジェクト

「次世代に福祉施設をひらいていくプロジェクト（通称：ふくひらプロジェクト）」は、
高校生に向けて「ただ、そこにいる」をキーワードに福祉施設をひらくことについて、
多様な関係者による推進会議（通称：Beらぼ）を設置したり、滞在ツアーを実施したりしながら、
その価値、生まれる可能性について考え続けながら、各地域や施設に取組みが広がっていくことをめざすもの。

2024年度に新たな取組みとして滞在ツアーを実施したことを機に、
2025年度からは東京都社会福祉協議会の中期計画に基づく重点取組み事項として位置付け。
総務部企画担当を中心に、東京都地域公益活動推進協議会をはじめとした
多様な関係者と協力しながらこのプロジェクトをすすめている。

東京都
地域公益活動
推進協議会

東京都社会福祉協議会
総務部企画担当

幹事会での
取組み報告

幹事による
Beらぼへの参加

プロジェクト担当

テーマ別研修会
の開催

ふくひらプロジェクト

Beらぼ
（推進会議）

BeingThinkingTour

ツアー内容の共有や検討

Beらぼメンバーによるツアーへの参加

ツアーチラシの作成

ツアーの受入れ

@東久留米
（社福）三育ライフ東京事業所

@日野
日野市内社会福祉法人ネットワーク
（社福）夢ふうせん　事務局
（社福）東京緑新会　日野市社会福祉協議会
（社福）東京光の家

東京都立大学
システムデザイン学部
インダストリアルアート学科

福祉施設に滞在するBeingThinkingTour

１日や２日といった限られた時間にもかかわらず、
高校生や居合わせた大人それぞれが変容していくBeingThinkingTour。
ほかのプログラムとは何が違うのか。何が大切なのか。
ここではBeingThinkingTourを紐解いていきます。

福祉施設に滞在する
BeingThinkingTourとは

高校生が福祉施設に滞在するBeingThinkingTour。
福祉施設という場所で、『**ただ、そこにいる**』時間を過ごしてみる試みです。

職場体験や実習、ボランティアのような
役割を持って『何かをする（Doing）』ものではなく、
一人の人間として『**ただ、そこにいる（Being）＝滞在する**』ことからはじまるツアー。
普段とは違う時間を過ごすなかで、
自分自身や他者、そして福祉について**思考を巡らせていく（Thinking）**ことを意図しています。

そんなプロセスのなかで、欠かせないのが**同じ体験をした仲間とのふりかえり**。
滞在を通じて自分のなかに生まれたものを少しずつ言葉にして誰かに手渡すことで、
新たな見方や視点に出会えたり、自分の常識やあたりまえが揺らいだり。
滞在と対話を重ねていくことで、深い気づきへとつながっていきます。

BeingThinkingTourを構成する大切な要素

福祉施設という場

学生にとっては遠い存在である福祉施設は、一人ひとりの思いやニーズを捉え、その人がその人らしく〝生きる〟ことを大切にしている場所。そこで日々生まれる関わりやそれぞれの関係性、そして流れている空気には私たちが日常で見失いがちな大切なあり方や視点といった学びや気づきが存在している。

「ただ、そこにいる」というあり方

職場体験でも施設見学でもなく、「ただ、そこにいる」ことから生まれる主体的な時間。「何かをする」「何かを求められる」という日常の枠からも抜け出し、「ただ、そこにいる」ということから生まれるものは、その場限りで終わらずに、自己や日常に跳ね返っていく。

多様な他者との出会いと対話

「滞在」から感じたことや思いを言語化し、他者と言葉を交わしていくことで、これまでの自分の価値観や考えが揺さぶられ、その時間はより内在化していく。限られた時間であるが少人数の参加ゆえに密度の濃いものとなり、相互にもたらす影響は大きくなる。

BeingThinkingTourの体制

高校生たち一人ひとりが安心しながらツアーに参加できる体制づくりが重要。
参加者同士だけでなく、多様な考えや価値観をもつ大人と出会うことも高校生にとって大切な機会といえます。
ただし、あまりにも参加者や同行する大人が多くなりすぎると、
高校生が安心して滞在したり、思いを言葉にしにくくなるかも…。
参加者の安心を第一に、ツアークルーを考えていくのがいいかもしれません。

ツアー参加者

都内在住・在学の高校生。
5、6名の仲間とともに、
福祉施設で「ただ、そこにいる」時間を過ごす。

ツアーの記録

滞在中のようすを、
写真や映像で記録したり、
グラレコに起こしてみたり。
コンダクターとは
違った立場から参加者に関わる。

ツアーコンダクター

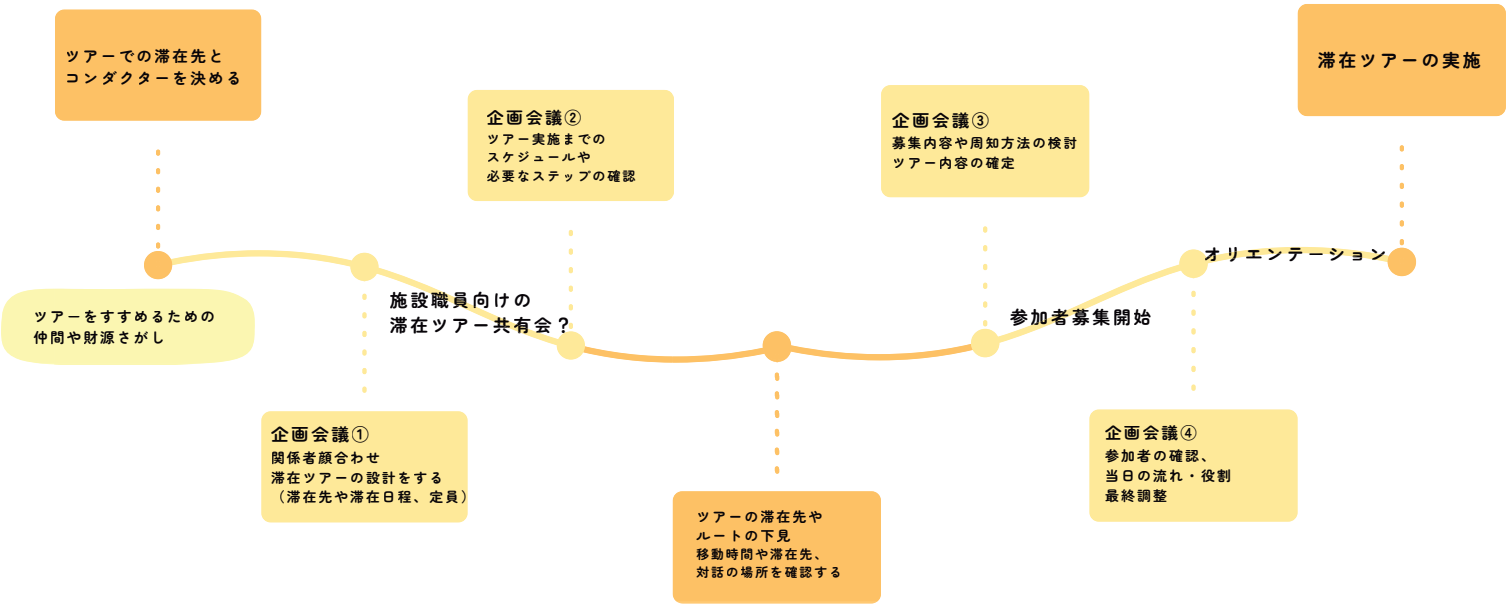
参加者とともに滞在し、
思考を巡らせる旅へと案内する。
対話のじかんでは
参加者の言葉を紡ぎ、問いかける。

ツアー事務局

関係者間の調整や、参加者募集、
ツアー備品準備等を行う。

BeingThinkingTourまでのフロー

滞在ツアーを実施するためには、まずは滞在施設やツアーコンダクターといった仲間をさがすことから。
以下のフローはあくまで例であり、それぞれ必要なステップをみんなで考えながらすすめていただければ。
受入れ施設の職員向けに事前にツアーの共有会をやったり、ふりかえり会をやってみたりするのもいいかもしれません。
うまくいかないことや生まれたもやもやも、仲間とともにしながら、
ツアーまでの道のりに最短も正解もありません。
同じ思いをもった仲間とともに、いろいろと悩みながらツアーを考えたり、
もやもやし続けたりすることがすすめていくうえでとても大切な時間かもしれません。



BeingThinkingTourのスケジュール

BeingThinkingTourはどんな構成がいいだろうか。
施設のいろんなところをみてもらいたいし、地域のことも知ってもらいたい。
もちろん、まちあるきをしたり、複数の施設に滞在することで、
またそれぞれに変化が生まれてくるかもしれません。
そうした思いがあればあるほど、ツアーのスケジュールが分刻みになってしまいがちで、
用意されたプログラムになってしまうかもしれません。

BeingThinkingTourで大切なのが、
高校生が福祉施設で「ただ、そこにいる」時間を通じて、
いろいろみたり、感じたり、考えたり、揺れ動いたりすること。
そしてそこで生まれたものを同世代のなかまとおしゃべりすること。
そんなふうにこの企画の本質を意識しながらスケジュールをみんなで決めていくのがいいかもしれません。

ツアー1日目
9:30　集合
10:00-12:00　滞在
12:00-13:00　お昼
13:00-15:00　滞在
15:00-16:30　ふりかえり

ツアー2日目
9:30　集合
10:00-12:00　滞在
12:00-13:00　お昼
13:00-15:00　滞在
14:30-16:30　ふりかえりとまとめ

BeingThinkingTourで準備するもの

滞在ツアーを実施するうえで、必ずこれを準備しなければいけないというものはもちろんありません。
なので、これまでのツアーで当日準備したものを例としてリストアップしてみました。
いろいろとツアーの内容を考えていくなかで、
「こんなものあったほうがいいかもねー」というものをみんなで出し合いながらすすめていただけると。
東久留米や日野でのツアーで準備したものも参考にしてもらえれば。

- ☐名札用紙、名札ケース
- ☐ツアーのしおり
  （スケジュールや集合場所、メモ欄等を含む）
- ☐ネームペン
- ☐模造紙
- ☐メモ用紙（A4ペーパー等）
- ☐ふせん
- ☐カラフルなペン（プロッキーやマッキー等）

福祉施設に滞在するBeingThinkingTour
―滞在と対話のじかん―

BeingThinkingTourの大切な要素である、
福祉施設に「ただ、そこにいる」ことと、
一緒に過ごした仲間と対話をするじかん。
それぞれどんなじかんなのか。
どんなことが大切なんだろうか。

ただ、そこにいる

「何かをする」という枠さえもなくなり、
「ただ、そこにいる」時間を福祉施設で過ごしていきます。

「ただ、そこにいる」時間を普段過ごしたこともないし、
そうした状況に戸惑いを感じる参加者もいるでしょう。
そんな違和感を抱く自分自身とも向き合いながら、
そこでの時間を重ねていくことが大切になります。

職員が「ここも知ってほしい！見てほしい！」といった気持ちから、
施設のことを説明しすぎてしまったり、案内しすぎてしまったりすると、
高校生自身の主体的な気づきや発見が失われることにつながり、
またそこでの体験が自分のものではなくなってしまうかもしれません。

かといって何もしなくてもいいというわけではなく、
高校生がいろいろと思いを巡らすことのできる時間になるように、
滞在にあたって意識してほしいポイントを伝えたり、
ようすをみながら声をかけてみたり。
高校生からの質問やつぶやきに応えたり、
参加者とともに「ただ、そこにいる」時間を過ごす一人として、
そこにいることが大切かもしれません。

「ただ、いる」って実際どんな感じ？

2024年度に実施したBeingThinkingTourを
映像で記録し、公開しています。
実際に参加者はどんな時間を過ごしていたのか。
どんな空気がそこに流れていたのか。
ぜひ映像を通して、
「ただ、いる」を体感していただければ…。

SCAN QR CODE

滞在シート

「滞在」の時間を過ごすときに使える滞在シートを公開しています。
滞在にあたって意識してもらいたいポイントをはじめ、滞在中にかきこめる
ワークシートも含んでいますので、ぜひツアーを実施される際にはご活用ください。

SCAN QR CODE

参加者にこんなふうに過ごしてもらうのもアリ

壁に貼られているポスターを
みてみたり

利用者のひとに
話しかけてみたり

職員のひとに
気になったことを聞いてみたり

「ただ、いる」ことにもやもやしたり

対話のじかん

滞在を通じてそれぞれが見たものや感じたことなどをみんなでおしゃべりするじかん。
自分のなかに生まれたものを他者と共有することで、
同じ景色が違って見えたり、自分の考えが揺らいだりして。
自分だけでは届かなかった深い気づきにつながっていきます。

うまくことばにできないこともあるかもしれません。
けれども、そのままを受け止めてくれる人が目の前に存在する。
そんなそれぞれの安心を生み出していくことで、
普段は話すのが苦手な人も、自然とその場では口を開いてしまうのかもしれません。
みんなが安心しておしゃべりできる場ってどんな場だろうか。
ぜひその場に居合わせた人みんなで考えてみてください。

どんなことが印象的だった？

どうしてそう思ったんだろう

ふくしってなんだと思う？

自由っていったいなんだろう

すごいってどうして感じたんだろう

ここはどんな場所なんだろう

ただ、いるって？

ツアーコンダクターの小松理虔さんは
どんなことを大切に？

対話対話と言うけれど、
そう簡単に進まないのが対話です。
なので、「対話なんかうまくいくはずねえよな」というところからスタートするようにしています。まとまらなくていいし、まとめなくていいし、言葉にならなくていいし、ううーんと唸ってるだけでもいい。じつは「ただそこにいる」だけで対話してるんだと思っていますし、人は無言でも対話してるんです。そうして互いの存在を受け止められて初めて、ポツリポツリと言葉が生まれてくる。何を語るのかも大事だけれど、そういう、言葉が生まれてくる瞬間に立ち会うということが、結構大事な気がします。対話というのは「団体競技」なのかもしれません。

ツアーコンダクターの青木彬さんは
どんなことを大切に？

対話とは、ひとつの正解に向かうものではないと思っています。だから僕が意見を集約してしまうことは避けて、あえて「問い」ばかりを投げかけるようにしてみました。そしてさまざまな言葉が紡がれるなかで、自分の想像を超えた意見や考え方に出会い、自分の当たり前が揺さぶられることを大切にしてほしいと考えていました。「きっとこの人はこうだろう」という先入観を持たず、ただ相手の語りに耳を傾ける。すぐに反応できなくても良いと思います。言葉にならないという沈黙もひとつの対話となるはずです。これらはソーシャルワークで言えば、バイスティックの７原則における「受容の原則」にも通じる姿勢ではないでしょうか。

BeingThinkingTour2025の記録

ここでは2025年度に実施した東久留米と日野のツアーのようすをお届け。
実際どんなようすだったのか。
高校生はどんなことを感じたのか。
受け入れた施設はどう思ったのか。

福祉施設に滞在する
BeingThinkingTour東久留米編

滞在日：2025年12月26日・27日 両日9:30-16:30
滞在先：（社福）三育ライフ東京事業所
　　デイサービスセンターシャローム南沢
　　特別養護老人ホームシャローム東久留米
参加者：都内在住・在学の高校１・２年生６名

ツアー関係者：

ツアーコンダクター
小松　理虔

地域活動家・ライター。
福島県いわき市小名浜在住。
地域活動事務所
「ヘキレキ舎」代表。
いわき市小名浜の商店街でオルタナティブスペースを運営する傍ら、地域の医療、福祉、食、文化芸術などのテーマでさまざまな地域活動・執筆活動を行っている。

ツアーの記録/写真家
加藤　甫

写真家／Studio oowa主宰
記録・ドキュメント・アーカイブの考え方をベースに、アーティストやクリエイターとの協働プロジェクトや企業・福祉施設などの中長期プロジェクトに伴走する撮影を数多く担当している。2022年横浜にStudio oowaをオープン。自身のアートプロジェクトとして知的障がいのある子どもたちとアーティストとの協働プロジェクトの企画や居場所づくりなど、場のひらきかたを模索している。

ツアー事務局
東京都社会福祉協議会 総務部 企画担当
内海美緒・西山千尋・市丸直美

ツアー実施までのタイムライン

- 6月 滞在先とコンダクターの決定！
- 7月 企画会議①：関係者の顔合わせ。ツアーの時期や滞在する場所、ツアーの構成についてざっくりと意見を出してみる。
- 8月 滞在先の下見
- 10月 企画会議②：施設のどんなところを感じてもらいたい？あえて説明しないのもいいかも？ツアー当日の内容を話し合う。
- 11月 企画会議③：参加者募集に向けてツアー内容を確定し、周知方法を検討してみる。
- 11月下旬～12月上旬 参加者募集期間
- 12月 企画会議④：ツアーの参加者も決まり、実施に向けて当日の流れや役割、必要なものについて最終確認を行う。
- 12月下旬 オリエンテーション
- 12/26-27 滞在ツアー
- 1/6 オンラインでのふりかえり

＊企画会議は施設関係者・コンダクター・事務局が出席

ツアー当日に準備したもの：

（参加者に配布）
ツアーのしおり兼滞在中のシート・バインダー・ネームペン
地域公益活動推進協議会つつまるグッズ（サコッシュ・ボールペン）
名札用紙・名札ケース・A4用紙・飲料水

（その他備品）
模造紙・油性ペン（カラフル）・ふせん（ふきだしのかたち）
チェキ４台・チェキフィルム・不織布マスク

（参加者の持ち物リスト）
筆記用具・室内履き・飲み物・その他自分が必要なもの

BeingThinkingTour in 東久留米　Day 1

１日目に滞在したのは、
地域で暮らす高齢者が通う、
「デイサービスセンターシャローム南沢」。
オリエンテーションのあと、
「じゃあみんな解散！」の
小松さんのことばでスタートした、
“ただ、そこにいる”じかん。

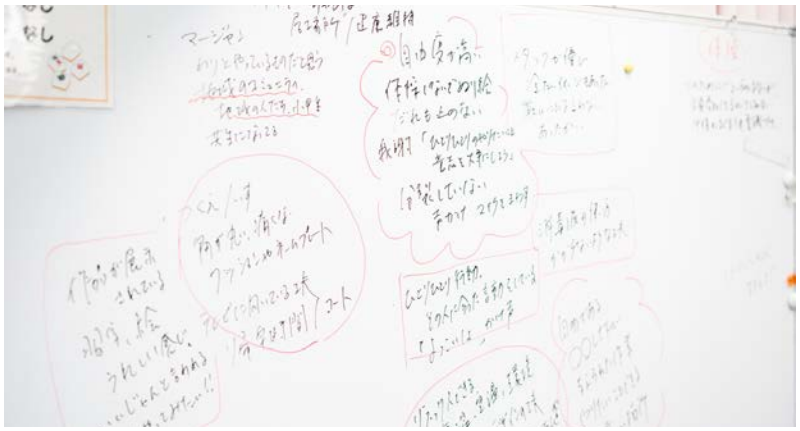
利用者の近くに腰かけてみる参加者もいれば、
遠巻きに場の様子を伺う参加者もいて。

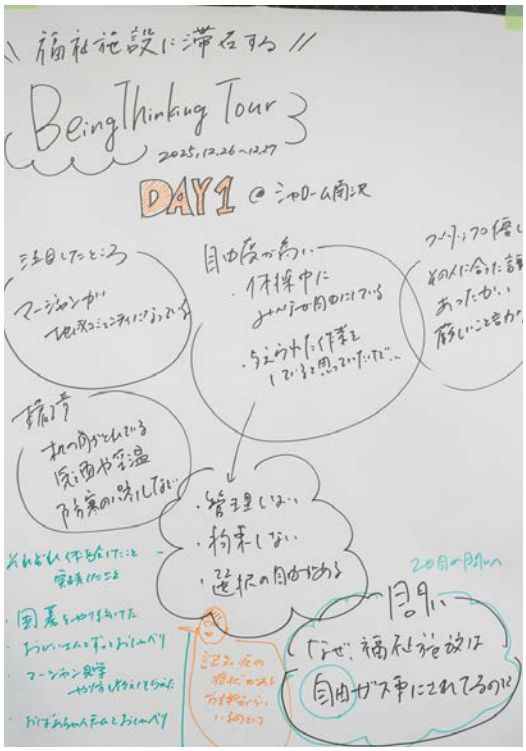
それぞれ見たものや気になったものを
ワークシートに書き残したり、
自分が感じた「ケア」をチェキで撮ったり。

「何かをする」という枠さえもなくなり、
「ただ、そこにいる」ことと向き合う参加者たち。
その状況に戸惑うかもしれない。
そんな自分とも向き合い、
そこでの時間を過ごしてみる。

“ただ、そこにいる”時間を過ごしながら
何を目にしたのか、何に気づいたのか。
そこでどんなことを感じたのか―。

ことばにならないかもしれない。そのままを、仲間と共有してみる。





BeingThinkingTour in 東久留米　Day 2

みんなの言葉が重なって生まれた、
「シャロームはなぜ自由が大切にされているのか」という問い。
そんな問いをそれぞれが持ちながら、
２日目に滞在したのは「特別養護老人ホームシャローム東久留米」。
１日目と違い、そこでは日々の暮らしが営まれている。

昨日とはなんだか流れてる空気も違うな。プログラムも少ないような。
ここで暮らしている人はいったいどんな人なんだろうか。
フロアが分かれているけどその違いはなんだろうか。

それぞれが昨日との違いや、自分自身や他者の変化を感じながら、
「ただ、そこにいる」時間を再び過ごしていく。

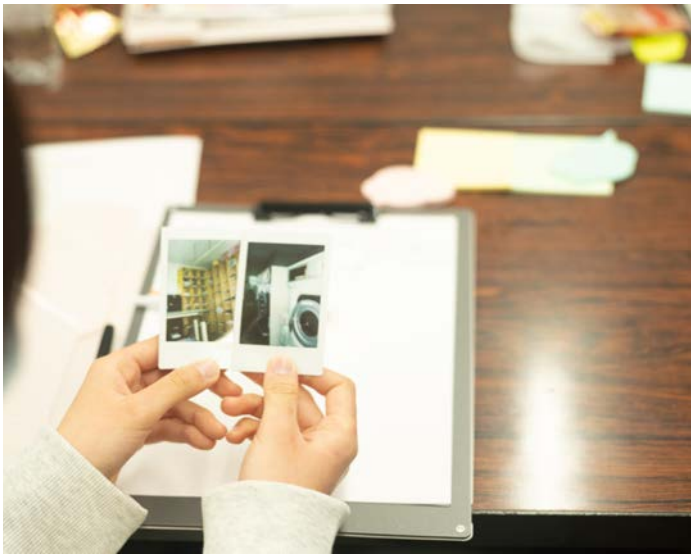
１日目、２日目の滞在をふまえて、
最後にみんなでふりかえりとまとめのじかん。

昨日と今日滞在した施設の違いはなんだろう。
昨日生まれた問いについて、
今日は何を感じた？

そもそも「家」ってなんだろうか。
そこにいることが「家」なのか。
それとも安心できればそこは「家」になるのか。

働く人の言葉もはいりながら、
みんなで考えてみる。

そして最後に、福祉って結局何をさすんだろうか。
「ただ、そこにいる」ってどんなことなんだろうか。
いますぐには答えはでないかもしれない。
そのままのものを共有していく。



ツアーを終えた高校生から生まれたことば

家族以外のご高齢の方と話す機会が無く、
はじめは戸惑いましたがこのツアーを経験して
相手を大切に思う気持ちなどが養われたと感じます。デイサービスのかたちも場所によってさまざまなやり方があることがわかり、福祉の多様さを理解できたように思います。これから先、少子高齢社会の影響で高齢の方や認知症の方と関わることが多くなると予想されますが、相手に対するリスペクトの気持ちが大切になってくるんじゃないでしょうか。

介護施設のイメージが変わった。
もっと冷たい場所であると思っていたけれどすごく温かい場所だった！この場所だけなのかもしれないけど...。高齢者に対して尊敬できるようになった。道で歩いているおじいちゃんおばあちゃんが一人でぼそぼそ喋っていたりすると、「何かしゃべってんなあ」くらいだったけれど、この人たちは昔はすごい（自分が計り知れない）体験をしているんだなと思えて、尊敬の気持ちをもてるようになった。小さな段差をみつけたときとかに、これはおばあちゃんだったらころんじゃうなとか、歩くのがゆっくりな人にも思いやりをもてるようになった。

ツアーに参加して、普段気づくことができない体験や知ることができたことがとても多かったです。外側から見るだけでなく、施設のなかにただいて感じるだけで、新しい気づきや発見があって。自分だけの考えではなく、他の人の視点からの話も聞くことでより学びを深めることができました。福祉というものへの考え方や見方が変わったし、先入観をなくして別の視点に変えて感じることが大切なんだとわかりました。

なかなか特別養護老人ホームに行く機会がなかったため、行けて良かったと思っています。私自身も「自分にできることはなにか」「福祉とは」などいろいろなことを改めて考えるきっかけになりました。
ツアーに参加して、一つの視点だけで見るのではなく、複数の視点つまり相手の視点や客観的に考えたりしてみる。小さな事でも、相手のことを尊重し、その人の視点でも考えながら接していこうと思うようになりました。

思ったより福祉って明るい。
私はもともと、福祉に対して明るいイメージを持っていたわけではなかった。実際に高齢者施設を訪れてみると、そこには利用者の方や働いている方のあたたかさがあり、想像していた雰囲気とはかなり違っていた。以前の私と同じように、福祉や福祉施設に明るいイメージを持っていない人は多いと思う。たしかに、明るいことだけではないかもしれないけど、それでも、そこには一人ひとりの暮らしがあり、人と人との関わりがあって、日常が続いていた。実際に足を運んでみて、福祉施設は「特別な場所」ではなく、「人の生活がある場所」なのだと感じた。先入観で福祉を遠い存在にせずに、一度みんなも自分で実際に福祉を確かめてみて欲しい。

「コミュニケーション」という言葉が印象に残っています。今までは何を話すかという会話の中身を重視しがちでしたが、このツアーを通して会話は言葉のやり取りだけではない、表情や体の動きなど非言語的な要素も含めて成り立つものなのだと思いました。特に高齢の方に対しては体のことも考えて話す雰囲気をより大切にしたいと思いました。私はつい会話に集中してアイコンタクトや体の動きをおろそかにしてしまうのですが、心から通じ合いたいのなら会話の中身よりもあなたともっと話したいという雰囲気を出すことが大切だと思いました。日常生活でも同じことが言えると思うので練習していきたいです。

福祉施設でどんなことが印象的だった？

家具や医療機器、小物なども利用者の安全や暮らしやすさが考えられていた。

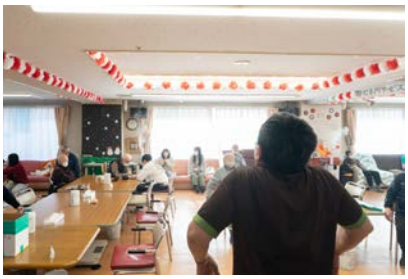
一つ一つの細かいところに職員さんの工夫が施されているのに驚きました。

とにかく職員の方の全てのケアの動きが洗練されていてプロはすごいなと思いました。私もレクチャー受けたかったです。それが少し心残りです。

消毒液が利用者に掛からないように、タオルにかけて、机を拭いていた。

利用者、地域の高齢者や子どもなどが、高齢者施設でマージャンなどを通して共生していることが印象的だった。利用者ではない高齢の方や子どもまでもが関わっていることに驚いた。名目はボランティアと言えど、利用者とボランティアの方は友達のような関係性なのかなと思った。

福祉の仕事はどう映った？



介護をしながら、リハビリなどを中心に復帰することをめざす場所だと考えていました。

自分で解決できない困っていることを抱えている人を支える仕事だと思いました。

介護施設などで実際に利用者の方の介助を行っているスタッフの皆さんは、身体的にも精神的にも大変な仕事だと感じたが、同時に、その仕事にやりがいや楽しさを感じながら働いているようにも見えた。
スタッフの方全員が利用者の方に敬意と思いやりを持って接し、一人一人の健康状態や表情に合わせてケアを変えていることに驚いた。日頃から利用者の方を観察し、信頼関係を築いていなければできないことだと思った。

精神的、身体的に一人で生活するのが困難な人などを、相手の視点を考えながら援助する仕事。

人と人とを繋ぐ場をつくる場所だと感じました。

誰かの人生に自分の中にある楽しさや活力をおすそ分けする仕事？
直接積極的に社会参加ができない、参加する機会が少なくなってしまった人を社会を多様化する？？みたいな仕事かなと思った。

「ただ、そこにいる」ってなんだった？

第三者からの目線で現場を知り、
思ったことや感じたことをすぐに聞くことができたり、
やりたいことをすぐに実践できる。

ただいるとは、何か目的を持って行動することではなく、その場に身を置いて周囲を感じながら過ごすことだと思った。目的があって行くのではなく、ただ滞在し、その中で自分が気づいたことを自発的に行ってみるというのは、さまざまな立場に立って物事を考えるきっかけになった。ただいるだけでも、そこにいる人の関わり方や空気、言葉にならない感情に気づくことができる。そうした小さな気づきの積み重ねが、他者と共に生きることを考える第一歩になるのだと感じた。

ボランティアのようにしなくちゃいけないっていうのではなく、もっと広い視点を持って感じることだと思います。ぬいぐるみのように第三者的な視点を持ってただそこにいることが、ただいることだと共有の場で感じました。

「ぬいぐるみ」という言葉がぴったりだと思いました。いいも悪いも判断せずただその場を観察する。行動したい気持ちをクッとおさえて周りを見ていると忙しくしていた時には気が付かなかった新たな発見がある、ということを学びました。

「ぬいぐるみ」みたいな第三者の目線から。
利用者、職員、保護者、職場体験などの
どの目線にもあてはまらないような目線からみれる。
余裕をもって考えられるし、
いろいろなことに気づける。

基本的に、その場で思ったことや、考えたことをメモするが、したいことや聞いてみたいことなどしたくなったら、してみること。

ツアーから１週間。改めてふりかえってみる。

**滞在ツアーを終えてそれぞれが日常に戻り１週間が経ったとき、
改めてツアーコンダクターの小松さんと高校生がオンラインでふりかえりを行いました。
ここでは１時間にわたったふりかえりのようすを切り取ってお届けします。**

ーツアーに参加してみて生まれたそれぞれの「変化」ー

小松
みんなツアーが終わってから1週間ぐらいは自宅で過ごしてたりとかしてると思うんだけど、改めて滞在ツアーから帰ってきて、自分はこんなことが変わりましたとか、こんなことを考えるようになったとか、いろんな変化あったと思うんですけど、この「変化」っていうワードでちょっと語ってもらえたらなと思います。

高校生
今までちょっと関わったことのある高齢者の方、ちょっとトラブルじゃないですけど、向こうの方からちょっとわーみたいな感じになっちゃって、トラブルになった経験っていうのが幼少期の時にあって。結構高齢者の方にすごいいいイメージを抱いてるってわけではなかったんですけど、それってやっぱり自分の少数、自分の中の一部の印象とか経験っていうのが、「高齢者」全体としてのイメージに反映されてしまってるっていうのはすごいあったなと今感じていて。今回シャロームには本当にいろんな方がいらっしゃっていて、その方と関わってみて、全然自分が昔関わった方とは違った感じっていうか、本当に全然違くて。そこで結構印象が変わったって変化したっていうのはあると思います。

高校生
高齢者の方と関わる機会が本当にないんで、やっぱり怖いなっていうか、高齢の方と話すのも、何話せばいいのかわかんないしっていうのがあって。やっぱり生きた時代も違うので、話もかみ合わないだろうなっていうか。でも今回のツアーで話してみたら、意外と昔を知ることも楽しいし、いろいろと話してみたら結構話も広がるなっていうふうに思いました。

高校生
ツアーが終わった後に、今まで道端にいる高齢者の方とか、見えないものに対してなんかすごい言っていたりして認知症の方なのかなと思うんですけど、そういう方を目にしたとき、自然と距離をとるというか、「大丈夫か？この人…」ぐらいにしか思っていなかった。でもツアーが終わってから、この人たちも自分が経験したことのないような本当に壮絶な経験をされてきたんだなって思ったら、私はなんて失礼なことを…って思うようになって、 すごい尊敬できるようになりました。

小松
それはね、本当にすごいですよね。やっぱりあの地域にね、空に向かってブツブツつぶやいてたりとか、あとはちょっとイライラしてるじいちゃんばあちゃんとかがいたりとか、なんか何にも知らないとちょっと怖いみたいな感じだったかもしれないけど、確かに今回本当にいろんな話を聞いたりする中でね、みんなそれぞれの人生を歩んできた人たちっていう、みんなもきっとリスペクトっていう感覚が生まれたんだろうなというふうに思いました。

ー福祉の仕事、福祉について改めて言葉にしてみる―

小松
ツアー当日のふりかえりのときにも質問したし、事前のオリエンテーションのときにも質問したと思うんだけど、やっぱり福祉って何なんだろうっていうのって、これすごく大事な、すごく難しい問いで、哲学的で難しいなっていうふうに思いつつ、改めてっていうことになるんですけど、福祉の仕事ってどんな仕事だと感じましたか？福祉ってきっとこういう言葉なんじゃないかみたいなこと、ちょっとまた共有してもらいたいと思います。

高校生
福祉のイメージなんですけど、私の中では結構明るいものに変化したっていうのと。実際に福祉の現場で働いている方っていうのを見て、やっぱり本当に人の命を預かる仕事でもありますし、責任と労働の過酷さっていうのはあるとは思うんですけど、すごいみなさん楽しそう。やりがいを持って皆さん輝いて仕事をなさっていて。福祉の仕事っていうと、私はやっぱり以前の自分が持っていた福祉のイメージと同じように、大変で辛くてみたいな感じが自分の中にはあったんです。もちろん大変っていうのに変わりはないとは思うんですけど、すごい皆さん楽しそうに利用者の方と関わってお仕事をなさってるっていうのが印象的でした。

小松
本当にね、人の命を預かるっていう責任とか、仕事の大変さっていうのは本当にみんなね感じてると思うし。でも楽しく、それでもね、輝いて、自分のそういうね、技術とか思いみたいなものを交換し合うような現場だったなということを改めて思い出しました。

高校生
やっぱり福祉はすべての人が幸せ、毎日を楽しく過ごせるっていうことがやっぱり一番だと思ってて。社会復帰っていうのももちろん大事だし、やんなきゃいけないけど、やっぱりそれも毎日が楽しくないとダメだと思うし。 シャロームを利用してる方もすごいみんな笑顔だったので。なんでしょう…。福祉っていうことを考えると、その第一がやっぱ毎日を楽しくっていうことだと思います。

高校生
もう他の二人が言ってたことがそのままな感じがして、本当に誰かを幸せにするとか、幸せに生活してもらうために動くみたいなのものがすごい福祉だなってやっぱ思ったんです。今回で言ったら、利用者さんと直接関わる職員の方もいれば、ずっと事務作業をしてたり、東社協の方もそうだと思うんですけど、実際に何か福祉を必要とする人とずっと関わるわけじゃない仕事も福祉だと思うので、そういうのも全部含めて考えると、やっぱ根本は幸せにするだと思うんです。直接社会参加する機会が少なくなった人とか、社会参加をあまりしない人も全部含めて社会だよって言えるくらいの、社会を多様化するみたいな。会社に行って仕事バリバリしてとかだけが社会じゃなくて、施設でみんなでワイワイするのも一つの社会だし。例えば保育園の子とかも、一個の社会だよねみたいな感じで、福祉ってと考えたときに社会を多様化するっていう、そういう感じなのかなって思いました。

受け入れた施設関係者は何を感じたのか。

高校生が、介護の現場に来て、実習ではなく、
「ただ、そこにいる」ということに、
どんなことが起こるんだろうと、楽しみにしていました。
シャローム南沢は、実習生や多世代のボランティアさんを、
日頃から受け入れています。
そのためご利用者の皆様は、いつも通り接することができましたし、
職員も会話やプログラム活動を通じて、楽しく過ごすことができました。

最後のふりかえりでは、事業所が課題と感じているところを、
高校生の皆さんは前向きにとらえてくださいました。
しかしやっぱりそこに着目されるんだから、
何とかしなければなと考えさせられる良い機会になりました。
皆さんどうもありがとうございました。

デイサービスセンター　シャローム南沢
センター長　一木　誠

すてきなツアーだな、と思いました。
参加された方の背景が福祉以外にも、さまざまな動機をもっておられることに、
既に何かいつもと違う発見をしてくださるのでは、と期待をしておりました。

私は介護職員ではありません。
でも、スタッフが普段している、ご利用者様への配慮、物の配置にいたるまで、
よく考えられていることを、皆さんの声を通して教えていただきました。
福祉施設なのになぜ自由なの？
自由が大切にされているのはなぜ？というテーマが
徐々に表れてくる過程は面白く、
福祉って優しさ、寄り添うこと、と思っていた、
硬い私の頭をぐるっと回していただきました。ありがとうございました。

ボランティアコーディネーター　眞田　亜希子

Being Thinking　Tour....
ただ、そこにいることの意味を考えて

今回は「福祉」の意味をボランティアや実習からではなく、
そこに『いる』ことで
環境から光、音、空気感等から、福祉施設を感じる機会を提供して、
学生たちがさまざまな想いを感じる体験ができたことを実感することが出来ました。
お話や行動することからは学べない「気づき」「温かさ」「悲しさ」「不思議な気持ち」...

それぞれが、自分の感性から「発見」➡「考える」➡「想像」することの大切さを
これからの未来に、TOKYO FUKUSHIに、興味を持ってもらうことができれば嬉しいです。

「福祉」を知り、関わるきっかけになることを願っています。
皆さんの目の輝きで「東京ふ・く・し」を明るく、
照らしていただきたいと感じるプログラムでした。

特別養護老人ホーム　シャローム東久留米
施設長　鷹部屋　宏平

福祉施設に滞在する BeingThinkingTour日野編

滞在日：2026年1月6日　9:30-16:30
　　1月7日　9:30-17:00
滞在先：（社福）夢ふうせん　工房夢ふうせん・工房夢ふうせんアネックス
　　（社福）東京緑新会　多摩療護園
　　（社福）東京光の家　光の家栄光園・光の家新生園
参加者：都内在住・在学の高校１・２年生４名

ツアー関係者:

ツアーコンダクター
青木 彬

インディペンデントキュレーター/社会福祉士
首都大学東京（現東京都立大学）インダストリアルアートコース卒業。学生時代は日野キャンパスにも通い、日野市内でのアートプロジェクトにも参画。

ツアー記録/写真家
加藤 甫

ツアー記録/写真家
川島 彩水

工房夢ふうせん
工房夢ふうせんアネックス

日野市内
社会福祉法人ネットワーク

多摩療護園

光の家栄光園
光の家新生園

ツアーサポーター
日野市社会福祉協議会
地域ネットワーク担当者
浜野智之・伊東直樹

ツアーサポーター
国立市社会福祉協議会
ボランティアコーディネーター
伊藤真理子

ツアー事務局
東京都社会福祉協議会 総務部 企画担当
西山千尋・市丸直美・内海美緒

ツアー当日に準備したもの：

（参加者に配布）
ツアーのしおり兼滞在中のシート・バインダー・ネームペン
地域公益活動推進協議会つつまるグッズ（サコッシュ・ボールペン）
名札用紙・名札ケース・A4用紙・飲料水

（その他備品）
模造紙・油性ペン（カラフル）・ふせん（ふきだしのかたち）・不織布マスク

(参加者の持ち物リスト)
筆記用具・室内履き・飲み物・その他自分が必要なもの

ツアー実施までのあゆみ

4/24（木）　東京都地域公益活動推進協議会幹事会にて説明

5/27（火）　青木彬さんに相談

青木 彬さん
日野市とのつながりがあり、青木さんのいう“アートを「よりよく生きる術」と捉える視点”で福祉を見ると何が生まれるのか…そんな思いから、コンダクターをお願いしました。

6/19（木）　日野市社協への打診

7/11（金）　受け入れ施設への打診

7/28（月）　日野市内社会福祉法人ネットワーク会議にて説明

9/5（月）　日野ツアー関係者で打合せ　日程決定！

10/24（金）　滞在先３施設の下見、すり合わせ

12/22（月）　事前オリエンテーション①

12/24（水）　事前オリエンテーション②

２年目の試みとして、社会福祉法人の地域ネットワークによる受け入れができないか？と考え、日野市内社会福祉法人ネットワークのみなさんとすすめていきました。
どこに行こうか？どんなふうにツアーを組むか？施設のどこで過ごしてもらおうか。関わる人が増えるぶん、思いの伝達がうまくいかずはがゆさを感じることも。それでも、わからなさを抱えながらもやってみよう！と思えたのは、日頃の法人同士の信頼関係があってこそ。
長年、小学生・中学生・大学生が福祉と接点を持てる取組みを続けてきた土壌があり、高校生との接点づくりの足掛かりなれば、との思いもありました。

1/6（火）　滞在ツアー１日目

1/7（水）　滞在ツアー２日目

1/16（金）　日野市内社会福祉法人ネットワーク会議での報告

1/19（月）　高校生とのふりかえり　ふりかえりのようすはラジオで

1/27（火）　日野ツアー関係者のふりかえり

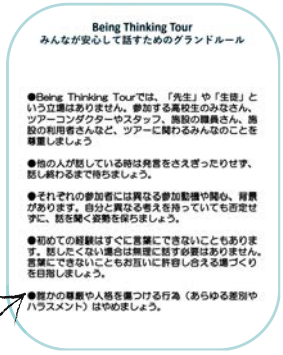
3/14（土）　ハートフルプロジェクト講演会にて
参加高校生登壇

福祉とは・・・想像すること

1日目

▶工房夢ふうせん・工房夢ふうせんアネックス
（(社福)夢ふうせん）

▶多摩療護園
（(社福)東京緑新会）



Being Thinking Tour
みんなが安心して話すためのグランドルール

●Being Thinking Tourでは、「先生」や「生徒」という立場はありません。参加する高校生のみなさん、ツアーコンダクターやスタッフ、施設の職員さん、施設の利用者さんなど、ツアーに関わるみんなのことを尊重しましょう

●他の人が話している時は発言をさえぎったりせず、話し終わるまで待ちましょう。

●それぞれの参加者には異なる参加動機や関心、背景があります。自分と異なる考えを持っていても否定せずに、話を聞く姿勢を保ちましょう。

●初めての経験はすぐに言葉にできないこともあります。話したくない場合は無理に話す必要はありません。言葉にできないこともお互いに許容し合える場づくりを目指しましょう。

●誰かの尊厳や人格を傷つける行為（あらゆる差別やハラスメント）はやめましょう。

10：00　オリエンテーション
ー初日は２施設にわかれて滞在。「グランドルール」をもとに滞在するって？どんなふうに過ごそうか？初めましてで緊張するけど、それも楽しみながら。オンラインで２施設をつないで挨拶したら、午後のふりかえりまで、いざ滞在スタート！

10：30　滞在する
ー「では、どうぞ」を皮切りに解き放たれる高校生たち。何をすればいいの？何もしなくていいの？そんなことを考えながら、利用者さんとお話したり、職員さんの動きを観察したりしてみる。

夢ふうせんは知的障害者・重度心身障害者施設、多摩療護園は重度身体障害者施設です。障害者施設といっても、そこに通う／暮らす方々や過ごし方、職員の役割は異なります。どちらの施設も利用者の年齢層は幅広く、障害特性も人それぞれ。まばたきで応答してくれる方、机をたたいて反応してくれる方。会話だけじゃない、コミュニケーションの幅広さや豊かさを感じる時間。

「ただ、そこにいる」ことで、
見えてくるものがある。

15：30　ふりかえり
ー夢ふうせんにみんなで集まってふりかえり。見つけたことや感じたことはさまざま、２施設のちがいや同じこともあったりして。滞在することへの戸惑いも言葉にして、明日はどんな風に過ごすか考える。

2日目

▶光の家栄光園
光の家新生園
（(社福)東京光の家）

10：00　オリエンテーション
ー昨日とは違う場所、違うメンバーで。昨日よりは少し緊張もほどけて。もう一度、青木さんと一緒に滞在するときの「グランドルール」を読みながら、どんなふうに過ごそうか考えてみる。

10：30　滞在する
ー今日はみんなで光の家。１日目と違う雰囲気や利用者さん・職員さんの姿に圧倒されながら、それぞれが面白がって過ごしてみる。光の家は視覚障害者の施設だと聞いていたけど、みんなめちゃくちゃ働くし、おしゃべりするし、なんだか「すごい」がたくさん。

お昼はみんなで歩いて、光の家が運営するカフェ「カナン」へ。利用者さんは日々この道を歩いて通って来ているんだね、と話しながら。まちで暮らすって、そういうことだよなあと口々に言いながらおいしいごはん。
時には余暇活動を覗いてみたり、展示作品から思考をめぐらせてみたり。高校生それぞれの「ただ、そこにいる」がある。

15：30　ふりかえり
ー過ごした１日を言葉にしながら、なんでそんなふうに思うのかな？とみんなで意見交換をする。同世代の言葉を受けて気づくこともあるし、この場だから言えることもあったようす。「“すごいと思った”ってどういうこと？」ってみんなで話してみると、障害があるからじゃなくて、人として自分よりできることがあるのがすごいっていうのかな、とか。わからないままのこともあるけど、それを明日からも抱えたままこの経験を宝物にしてほしいな、と思いながら。

「ただ、そこにいる」って？

いつ、どこで、どう動くかによって自分でその時間や自分の立場や周囲との関係や発見を作れること。
自分に合った過ごし方ができたら、自由であることを存分に楽しめる。

お互いに相手にとって新しい存在になることだと思います。うまく話しかけられなくても、新しい存在が隣にいるだけでお互いの刺激になると思います。

自分で自由にその場を体感することができること

役割がなく目標もないため何をしていいか本当にわからなくなりました。頑張らないということを頑張っているようで、逆に普段はいろいろな要素を持って過ごしているということに気づくこともありました。

参加してどうだったかな

●ツアーに参加してどんな変化があった？
ツアーに参加する前は福祉施設のことを遠い存在のように感じていたけれど、参加してみて、より身近に感じるようになりました。また、以前は障害のある方が街中にいると「怖い」と感じて避けることがよくあったけれど、今は「傷つけられることはない」と安心できるようになり、見る目が変わったと思います。

●印象的だったことば
「障害のある方も私たちとなんら変わりはない」です。今日の体験を通して私たちが学んだことの集大成だと思います。みなさん、私とコミュニケーションを取ろうとしてくれて、自分で出来ることは頑張ってやろうとしている姿を見て、私たちと同じ対等な存在なのだと感じました。

●福祉の仕事ってどう感じた？
人のことを誰よりもよく見ることが必要な仕事だと感じました。利用者一人ひとりの得意なことを見抜き、個人に合わせた仕事を考え工夫されている姿に心打たれました。

●参加前後でどんな変化があった？
もとから興味はあったけれど、それぞれの利用者さんや職員さんの日常に触れられた気がして、以前より別世界な感じがしなくなりました。

●印象的だったことば
「みんなすごい」ということば。

●一番印象的だったことは？
普段関わる機会がないというだけで特別視せず、どんな人に会っても一人ひとりを見るようにしていきたい。

●感想を自由にどうぞ！
「滞在」という言葉が気になってとりあえず申し込んでみたのですが、想像していた以上に自由であることは難しく、同時にとても楽しかったです。同年代だけでなく、さまざまな立場の大人とも会話ができ、知らない世界に飛び込み、充実した時間を送れたことが自分の自信にもなりました。
ぜひ、さまざまな場所でいろんな人に体験してもらいたいです。

●ツアーに参加してみてどんな変化があった？
一番は“障害者”の方のイメージが変わりました。どう話していいかわからない、どこか違う世界と思ってしまっていたところもありましたが、施設の方がおっしゃっていたように私たちと変わらないと感じました。また自分の積極的に話していく姿勢も少し変わったと思います。

●福祉の仕事ってどう感じた？
福祉というのは高齢者や特定の人に対してあるのではなく、支援を受けたり、幸せに楽しく暮らすために全員に必要なものだなと思いました。福祉の仕事は何かを足したり導いたりするだけでなく居場所を守るために、ある意味何かを削る仕事なのかなと感じました。

●同世代に伝えたいこと
やはり私たちと変わらないということです。個々人で得意不得意があるように違いがありすごいと思ったり尊敬する部分がたくさんあると伝えたいです。

●感想を自由にどうぞ！
今回の福祉施設のツアーで多くの発見や学びをいただき、たくさん考える２日間でした。日常生活で何もしないという空間は思っている以上に少ないのだなと感じました。

●参加してみてどんな変化があった？
全然自分たちと変わらないということを知れた

●印象的だったことば
「みんな目が見えないから自分たちのように生活できないんじゃないかと思ってたけど、全然違った」ということば。自分たちよりできないことが多いと思ってたということをことばとして発してたのがすごいと思った。多分たくさんの人が思っていることだと思うし、だからこそ、この経験を伝えていけたらなと思った。

●同世代に伝えたいこと
みんな得意なこともあるし苦手なこともあるから、秀でた部分や得意な部分をいろいろな人から見いだして接していくのがいい。みんな違うけどみんな同じ。

●感想を自由にどうぞ！
最高だった。

ふりかえり

ー滞在ツアーから２週間、青木さんとみんなでふりかえってみました。

ーツアー当日の写真を見ながらふりかえってみたけど、思い出してきましたか？

自分がその場にとって特別な存在だと思っていたけど、写真をみると案外なじんでいたんだなと思いました。特に１日目は空気になって見ていた気がします。

「それではスタート」って放り出されて、役目もなくて、その場にいるのが居心地悪かったです。でもしばらくいると、そこにいる人と話したくなる気持ちが自然に湧いてきました。

当日のふりかえりのときに「周りの友達にどんなふうに伝えますか？」と聞かれました。実際学校で話そうと思っても、うまくまとまらなかったです。伝えるのが難しいなと思いました。

ー利用者さんや職員さんに聞いてみたかったなと思うことってありますか？

家族が利用料金を払って施設に通っていると聞きました。例えば家族がご両親しかいなくて、そのご両親が亡くなったら利用者さんが一人になっちゃう。そうしたら、利用者さんはどこに行くんだろう、ということが気になります。

滞在ツアーでは利用者さんの施設での姿しか見ていないから、家族と施設とのかかわりを見られるといいなと思いました。

光の家で運営している売店で、買い物に来る地域の方とレジをする利用者さんとのかかわり、雰囲気を感じてみたいです。

ー滞在ツアーから少し時間がたって、改めて滞在してみてどうだったかなあ。

障害のある方と接するのが初めてで、遠い世界の人だと思っていたんですけど、福祉施設のイメージが変わったし、世界が広がったなと思います。

２日間で過ごし方を変えてみて、結局自分が動こうと思えば何でも新しい経験になるんだなって。自由度が高い分、自分がどうしたいかで変わるんですね。

役割や目標が決まっていなくて、その時感じたことをそのまま自分で思っていたり誰かに伝えたりしていました。

青木さんから
“何でもできる自由”と、“自分がここにいる不自由さ”を感じながら、戸惑いつつそれぞれの過ごし方を開拓してくれていたなあ、と一緒に滞在しながら感じることができました。

受け入れ施設から

ただ『滞在する』だけ。えっ？！本当にそれで大丈夫？それが最初の企画説明を聞いて私が思った正直な感想でした。受入前の丁寧な事前説明・実際の滞在体験・終了後のふりかえり、それをセットで行わないと理解は深まらないでしょう！ぼーっと立って手持無沙汰になる場面があっても、それも学び？うん、居心地の悪さから自分なりにどうすれば良いか考える事も大切か。

そんな風に思っていた私は、
滞在中及び滞在後のふりかえりの高校生たちの様子に驚かされる事となる。

何か感じてもらえれば、という私の予想を遥かに飛び越えた高校生たちのリアクションに感動しました。積極的に利用者に働きかけてコミュニケーションを図り、その場の空気を感じ取れる感性の高さ。そして、自分が感じた事を自分なりに言語化する力。『施設とは、全部介助する、全部助ける場所だと思っていた。でも違った。自分のやれることは自分でやっていた。』『施設とは、他の家族が通わせる＝仕方なくいる場所だと思っていた。でもそんなことなく楽しそう！』『どこか遠い世界の話のように思っていたが、施設を知る事で別世界な感じは無くなった。』おお！凄い！こちらが説明しなくとも、きちんと感じて欲しいところをキャッチしてくれている！

きちんと言葉にしないと伝わらない、と教えられてきた自分にとっても、これまで外部の方を施設に受け入れてきた自分のやり方を見つめ直すきっかけにもなりました。『必ずしも言葉にせずとも、想いはきっと伝わる』。そんな事を確認できた、滞在ツアーでした。

これは是非とも色々な地域でやった方が良いと思います。

次は我が家のＪＫも参加させたいと思います！

夢ふうせん　笠原　浩昭

「ただ、そこにいる」のフレーズが心に残る。当たり前にいる、不自然にいる、気付かれないようにいる、笑顔でいる、高校生達がどのような気持ちで滞在するのか。「ただ、そこにいる」ことの簡単で難解な問題に興味が湧いた。

福祉施設として50年余りの歴史がある多摩療護園では、これまで幾多の実習生やボランティアを受け入れてきたが、「いるだけの高校生」が何をもたらすのか、初めての試みとなった。知ってもらいたい、経験してもらいたいとの思いを限りなく抑えながら、知りたい、触れたい、やりたいのアンテナを探っていく。

山盛りの不安や戸惑いがあって当たり前のスタートラインではあったが、この冒険（企画）に手を挙げた勇者（高校生）達と接すれば、それは徒労に終わる。AIが相談相手になり得るこの令和の時代に、障害者施設に興味を持った若者が、何かを感じ得ようと目的を持って企画に参加してくれたこと、短い時間なりに積極的に動き多くの気づきを得られたであろうこと、これだけで十分過ぎる収穫ではないだろうか。

今後の勇者達の活躍に期待したい。

多摩療護園　和智　伸悟

受け入れ施設から

福祉施設として、最近では小学生が見学などで来られる機会が増えています。また、中学生については職場体験があって、体験先に福祉施設を選択された中学生が来られます。今回、この企画を知った際、「そういえば高校生が福祉施設に来る機会が少ないな…」と改めて気づき、個人的な第一印象として意義のある企画と感じました。

受け入れ準備の中で、どうしても実習受け入れのような体験型カリキュラムを考えがちですが、そういうのは「いらない」と自分に言い聞かせ、また、受け入れ先の部署の職員にも積極的な説明などは基本的には「いらない」と伝えて共有しました。

結果的に、やはり高校生ともなると取組みや視点、考え方や受け取り方等の全てにおいて、こちらからの提示がなくても「主体的」で、私の想像を超える「自発性」を強く感じました。こちらからカリキュラムを提供することに比べ、彼ら自身からにじみ出てくる「主体性」「自発性」には敵わないです。彼らの受け取る印象の深さが大きく違うと思います。

そのような点において、今回の「滞在型」企画が「体験実習型」との差別化がされ、今後も継続されれば、意義が拡がっていく企画になっていくと思います。

東京光の家　山本誠太郎

日野市内社会福祉法人ネットワークの事務局である社協から

透明人間にもなれる。自分の過ごし方次第。
やってあげる、より、いっしょに。
特殊なものでなく、みんなにあるもの。
みんながやりやすい幸せになれる方法をつくる。

今回参加した高校生たちが2日目の最後に行った全体のふりかえりの中で各々が発した言葉のうち、最も私の印象に残ったものだ。

彼らは、学校でたまたま見つけ、あるいは気の利いた先生に背中を押されて、このツアーに飛び込んだ。

受け入れた福祉施設は、いつものホスピタリティを少しだけぐっと堪えて、利用者と職員が協力して、できる限り自然体で彼らを受け入れた。

利用者は彼らと接する中で笑顔を見せ、元気に彼らと過ごすその姿を職員はしっかりと目にしていた。

彼らが得たものは、他人から教えられたものではない、彼らそれぞれが体験して得たもの。次にツアーへ飛び込む誰かが何を得られるかは保証されていない、ように思う。

ただ、今回のツアーでは、こんなことが起きた。

日野市社会福祉協議会　浜野　智之

BeingThinkingTourのチラシ制作に関わってみた立場から

高校生に向けた周知チラシの作成には、
ツアーコンダクターである青木彬さんの
つながりにより、東京都立大学システムデザイン学部
インダストリアルアート学科の大学生お二人、そして
楠見清教授に協力をいただきました。

制作過程では企画について言葉を交わしながら、
思いを共有する時間も過ごしました。

最初にポスター制作のお話をいただいたときは、福祉は自分から遠いものに感じていたので、「自分たちで大丈夫だろうか」という不安がありました。しかし、話し合いを重ねる中で、日々福祉に関わる皆さんの滞在ツアーに対する思いを知り、私たちが一方的に作るのではなく、思いを伝えるための表現を共に探っていくことができたのがとても嬉しかったです。

高校生と福祉施設の間にあるものとして、「扉」だと印象が強くなりすぎてしまう感覚がありました。「ちょっと入ってみる」という最初の一歩のハードルを下げる存在として、のれんが良い仕事をしてくれたと思います。
話し合いの中で印象に残っているフレーズがあります。それは、「複雑さこそ健全」という言葉です。今回のイベントの重要なキーワードである、「ただ、そこにいる」というのは、簡単なようでいて、実は居心地の悪さといった複雑な感情も内包している行為です。私も、「福祉に対してどんな気持ちで向き合えば良いかわからない」という感覚がありました。しかし、「その複雑な感情は、未知のことに対して抱く感情として健全なものなんだよ」と言っていただけた気がして、その感情に向き合うことへの怖さのようなものが薄れたと思います。
また、ポスターを作る中で、以前のツアーの報告書を読み、「福祉」は福祉施設だけで行われている営みではなく、社会に生きる私たち一人ひとりの幸せについて目を向ける行為でもあるのかな、と感じました。

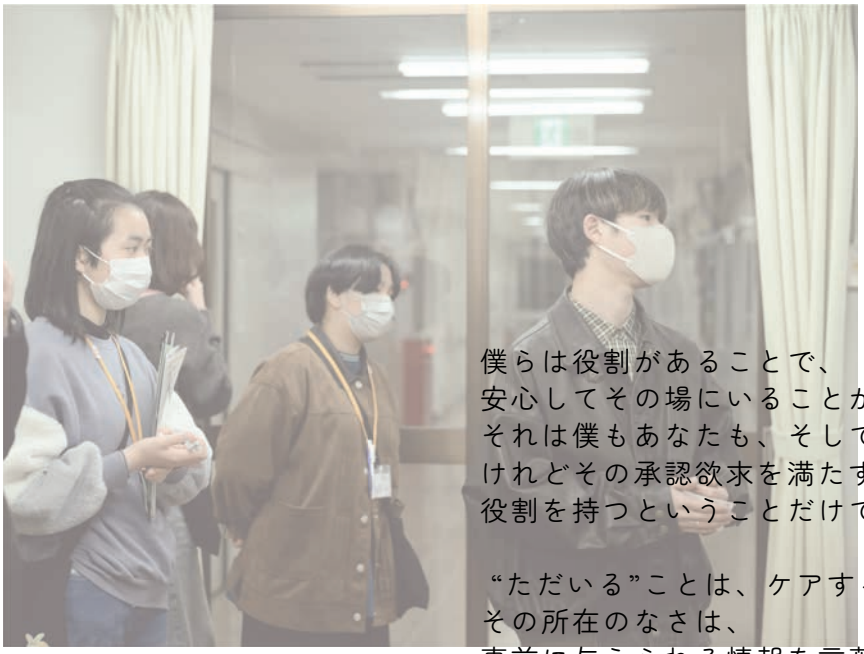
東京都立大学システムデザイン学部インダストリアルアート学科学生（２名）

日頃アートとデザインがどのように社会関与できるかをテーマに大学で授業をしている身として、
今回の取組みはとても有意義な協働的実践となりました。

高校生に向けた広報活動を年齢の近い大学生が担うという着想は、
参加学生の感性を臆することなく発揮させ、
意見交換を重ねる中で逆に大人たちに新鮮な学びの機会を与えてくれました。
福祉への理解の輪を広げていく上で若い世代の創造性とデザインの力に
改めて注目してもらえたら幸いです。

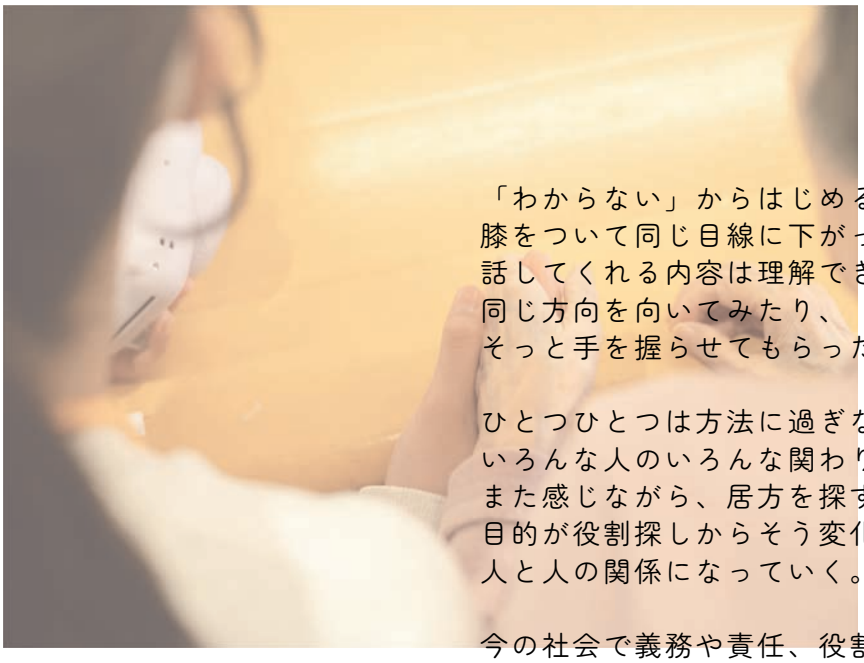
東京都立大学システムデザイン学部インダストリアルアート学科教授　楠見清

BeingThinkingTourを記録した立場から



僕らは役割があることで、
安心してその場にいることができます。
それは僕もあなたも、そしてあの場にいた人たちも同じ。
けれどその承認欲求を満たす手段は、
役割を持つということだけではないはずです。

“ただいる”ことは、ケアする側という特権を剥ぐ。
その所在のなさは、
事前に与えられる情報を言葉で聞いても
理解が追いつかなかったり、忘れてしまったり。
また、見えなかったりして不安に思っている人たちと
近しいスタートラインから始めるということなのだと思います。



「わからない」からはじめる。
膝をついて同じ目線に下がってみたり、
話してくれる内容は理解できなくても
同じ方向を向いてみたり、
そっと手を握らせてもらったり。

ひとつひとつは方法に過ぎないけれど、
いろんな人のいろんな関わり方を見ながら、
また感じながら、居方を探す。
目的が役割探しからそう変化したときにはじめて、
人と人の関係になっていく。

今の社会で義務や責任、役割がない状況で
彼ら彼女らと出会う機会は少ないのかもしれません。
けれどそれこそが、彼ら彼女らが
一番望んでいることなのではないかとも思うのです。

写真家　加藤　甫

ふくひらプロジェクト
推進会議（Beらぼ）

多様な関係者が集い、
BeingThinkingTourについてさまざまな角度から考えてきたBeらぼ。
どんなメンバーで、どんなことを考えてきたのか。

Beらぼについて

2025年度から設置された「次世代に福祉施設をひらいていくプロジェクト」推進会議（通称：Beらぼ）。
福祉関係者だけでなく、地域活動家やアート関係者、高校教諭など多様なメンバーで構成。
定期的に考える場をひらき、BeingThinkingTourにおいて大切な要素やもたらす価値を考え続けたり、
より多くの施設や地域で実施していくために必要なことを考え続けたりした。
メンバーは全６回にわたる会議とともに、滞在ツアーにも参加。

Beらぼメンバー

（敬称略/五十音順・肩書きは2026年３月時点）　★…Beらぼ座長

青木　　彬　　インディペンデント・キュレーター/一般社団法人藝と
浅野　大輔　　（社福）夢ふうせん　施設長/東京都地域公益活動推進協議会幹事
伊藤　真理子　（社福）国立市社会福祉協議会　国立市ボランティアセンター
我謝　　悟　　（社福）三育ライフ東京事業所　統括施設長/東京都地域公益活動推進協議会幹事
小松　理虔　　地域活動家/ヘキレキ舎
★ 田島　博志　（社福）村山苑 救護施設さつき荘　施設長/東京都地域公益活動推進協議会幹事
友利　和江　　（社福）愛成会　メイプルガーデン施設長
中村　俊佑　　東京都立五日市高等学校 教諭
三浦　佳奈　　山崎学園富士見中学校高等学校 教諭

-事務局-
内海　美緒・西山　千尋・市丸　直美　　東京都社会福祉協議会 総務部 企画担当

Beらぼの開催状況

Beらぼスピンオフ
ツアーコンダクターの小松さん、青木さんと事務局で、この間感じていたツアーの伝わりにくさやもやもやについて考える会

12/26-27
BeingThikingTour in 東久留米
2026/1/6-7
BeingThikingTour in 日野

3/6
東京都地域公益活動推進協議会
テーマ別研修

01　7/30 16:30-17:30
（テーマ）
「ただ、いる」を知る
キックオフ。BeingThinkingTourのことと今年度の取組みについて共有。その後は滞在経験者である小松さんや、受け入れた施設から企画の意義や、高校生や施設、地域への作用について共有してもらう。また学校での探究授業についても情報提供をしてもらう。

02　8/28 16:00-18:00
（テーマ）
企画の可能性を探る
BeingThinkingTour ってどんなところが大切なんだろうか。学校での探究授業や、福祉施設による次世代への取組みについてメンバーより共有してもらいながら、このツアーのことを考えてみる。

03　10/28 16:00-18:00
（テーマ）
企画の可能性を探る
BeingThinkingTour ってどんなところが大切なんだろうか。福祉施設が受け入れる探究授業や、次世代への取組みについてメンバーより共有してもらいながら、このツアーのことを考えてみる。あわせて、高校生へのアプローチを検討してみる。

04　1/15 14:00-16:00
（テーマ）
ツアーをふりかえる
実施したツアーをふりかえっていく。参加者や関係者はそれぞれどんなことを感じたのか。ツアー構成はどうだったのか。コンダクターの大切な視点や関わりとは。滞在ツアーの大切な要素を整理していく。

05　2/12 14:00-16:00
（テーマ）
発信と今後について
これまで考えてきたことをどうやって伝えていくか。そして次年度はどんなことを取り組んでいったらいいか。みんなで出し合ってみる。

06　3/12 14:00-16:00
（テーマ）
１年をふりかえる
3/6のテーマ別研修会をふりかえりつつ、この1年間Beらぼメンバーとしてそれぞれが関わってみて感じたことを言葉にしてみる。

東京都地域公益活動推進協議会　事業開発委員会　テーマ別研修

『滞在』がひらく福祉の可能性

トークセッション14:30-16:15
「＂滞在＂をキーワードに高校生に施設をひらくことで生まれるもの」

登壇者：Beらぼメンバーら
小松　理虔さん/青木　彬さん/我謝　悟さん
浅野　大輔さん/加藤　甫さん/三浦　佳奈さん

東久留米、日野それぞれの滞在ツアーのようすをムービーでお届けした後は、
関係者が登壇して、それぞれからどんなようすだったのかを共有。
そのあとはこの企画について、それぞれのことばで伝えていく時間。
そうした話をうけて、「都域でこの取組みを広げていくには？」「高校生への関わり方で大切にしていることは」
「滞在ツアーを施設職員や利用者はどう捉えているか」など、会場から問いが生まれていきました。

グループワーク 16:15-17:00
「＂滞在＂がひらく福祉の可能性を探る」

トークセッションのあとは、
居合わせたひとたち同士でおしゃべりするじかん。
滞在ツアーのことを聞いて、まず何を感じたのか。
どんなことが印象的だったのか。
「ただ、そこにいる」って
いったいどういうことなんだろう。

それぞれの肩書きや立場の枠をこえて、
一人の人間として、目の前のひとと言葉を交わしてみる。

それぞれのグループで、
どんなはなしがでたのかは、そのあと全体でも共有。
「高校生はすごい」「自分だったら、ただいられない」
そんな声もきかれました。

会場の後方では、加藤さん・川島さんが撮ってくれた
各ツアーのようすを写真で展示。
Beらぼメンバーの青木さんの展示協力により、
当日の雰囲気を写真を通して伝えることができ、
またそこから会話も生まれていました。

参加者からの声 *アンケートから抜粋

- 実習では受け入れ施設側も参加者側も身構えてしまいますが、滞在では自然と学び、気づきあうことができると感じました。
- 高校生をなめていたというといやな表現になってしまうが、ふせんにして文字にして対面で語り合うパワーがあること、すごく感動しました。ただ、いるって何だろうを考えて共有するワークは自分の意見をみつめるにも、他の人の意見を聞くにあたっても大切な時間となりました。
- 高校生が福祉施設に滞在することをきっかけに、福祉施設が特別な場所ではなく地域の日常の一部になり、施設が地域の居場所になる可能性を感じることができました。
- 高校生の感性の豊かさを引き出す―。大変重要だと思います。地域で「ふくし」を考える礎につながると思います。
- 福祉施設の日常は、一般市民にとって「特別」な場所で、利用している人も「特別」という認識をもっているとすれば、やはり日常の延長上にあるという「ふつう」にひらき、その感覚を持てるか、託していけるか実際に行動していけるかということだと思う。
- 今回の研修では職種を超えた対話を通じて福祉の本質について大いに学ぶことができました。
異なるバックグラウンドでも「根幹は一緒であり、今日の対話こそが福祉の話だ」と強く感じました。
利用者さんにとっても職員にとっても地域にとっても居場所になる可能性を考えを深めることができました。
今日何か答えがでるということではないが、今日のようにみんなで考え続けて、思いを話し合うこと自体が大事だねという願いのような思いを強く感じ、これからも考え続けていきたいと思いました。

-Beらぼメンバーからみた
BeingThinkingTour—

BeingThinkingTourについて、
Beらぼメンバーがそれぞれ言葉にしてみる

※肩書きは36ページを参照

何をするにもまず検索する、SNSで似た価値観の人とつながる－
現代の高校生にとって、それが日常だ。
その日常の中では、「ただ・そこにいる」時間も、
自分と異なる他者と出会う機会も、意図してつくり出さない限りなかなか訪れない。

だからこそ、この滞在ツアーは貴重だ。
何かを達成しなくていい、何かに役立てようとしなくていい。
そのような時間の中で、生徒たちは自分が何を感じ、何に戸惑うのか、静かに向き合うことができる。
ボランティアでも職業体験でもないこの滞在は、福祉を知る場を超え、自分自身と社会を考える場になる。

三浦　佳奈

これまで、教師としてどんな生徒を育てるかということを考えたとき、
個々の生徒が自分の強みを活かし、何らかの価値を生み出し、
社会に貢献する存在になることを意識して指導してきたように思う。
しかし、今回のテーマである「ただそこにいる」ことはこの考え方を再考する契機となった。

自分自身、限られた時間の中で仕事をするなかで、
職場や生徒にどんな貢献ができるかを常々考えるマインドになっていた。
ともすれば、仕事をしない同僚や怠惰な生徒にイライラしてしまうこともあった。
現代社会では「ただそこにいる」ことがとても難しい。
人といるときは気の利いたことを言わないといけなかったり、
先回りして行動することが求められたりと、なかなか忙しない社会である。

「ただそこにいる」というのは何もしないということではない。
自分の心に耳を傾けるということであり、相手の想いに思いを巡らせることである。
自分が今、何を感じているのか。そして、相手がどんな気持ちでいるか。
沈黙も大切なコミュニケーションである。
現代的なテーマであるWell-beingは、「幸福感」や「満足感」に近い言葉であり、
まさしく今回のテーマである「ただそこにいることが認められ、誰もが安心して認められる場」で実現されることである。
多様性や豊かな人間性を育む教育的価値のある今回の滞在ツアーを今後もより深化させ、
参加生徒の変容にも注目していけたらと願っている。

中村　俊佑

本企画に関わらせていただき、
「何かをしてあげる」と構えず、ただそこにいることを楽しむ交流こそが、
福祉を身近にし、気楽に関われる関係性を築くのだと改めて実感しました。

高校生が利用者さんや職員の方と触れ合う姿は、
施設が「特別な場所」ではなく、日常の延長線上にあることを目の当たりにし、
また施設のみなさんの想いも感じることが出来ました。
今回、参加させていただいたことから、
社協として高校生や住民が施設へ気軽に立ち寄り、
顔見知りになれるような温かい場づくりを地域で実践していきたいと思っています。

伊藤　真理子

日野市では小学 4 年生が 1 年間福祉について学ぶ「ハートフルプロジェクト」という授業があり、
中学 2 年生で職場体験があり、大学生の社会福祉士や保育士の実習生を受け入れる事業があります。
その中で、高校生との接点が少ないと思っていました。

今回「滞在」ということで高校生を受け入れて、
「福祉というのは高齢者や特定の人に対してあるのではなく、支援を受けたり幸せに楽しく暮らすために
　全員に必要なものだと思いました」という気づきを得た方がいました。

福祉の良き理解者を増やすことができて、施設をひらくことの意義を改めて感じました。

浅野　大輔

受け入れて良かった！
最高に素敵な時間でした。
高齢者施設のイメージが、マイナスの報道によって作られていて、
それが、今回の滞在で彼らから、「明るい」「暖かい」いう言葉をもらえ、
イメージが180度変わったと言ってくれたことがほんとうにうれしかったです。

この企画をさらに広げていき、福祉施設をもっと多くの人に知ってもらう。
そんな努力を続けていかないといけないと思います。
高齢者施設で生活されている方、通所されている方、それぞれが歩んできた人生があります。
この施設を利用された方々が、素敵な生き方をされていること、
そしてそれをそっと支えている職員の働きも、ぜひ知ってほしい、感じてほしいと思いました。
そんな思いを強くした二日間でした。

我謝　悟

実習生や職場体験やボランティア。
福祉施設には、さまざまな「目的」や「役割」を持った人が訪れ、利用者と関わり反応し合います。
でも今回この企画で施設を訪れた皆さんは、
ただそこにいる、一見すると役割のない不思議な存在です。

本当の意味で「ひらかれた施設」とは、
そんなニュートラルな誰かがいつの間にか溶け込んで、
同じ空気を吸い、程よく混ざり合う「チルい」時間を増やすことだと感じました。
反応が良くても悪くても、あるいは反応がなくても、お互い何かが残ります。
皆さんが今回、肌で感じたその「何かしら」を、これからも大切にしてくれたら嬉しいです。

田島　博志

「ただ、いる」に宿る存在の肯定

今、あなたはどんなところで、どんな風にこの文章を読んでいるでしょうか？
忙しい仕事の合間に職場のデスクでページをめくった人、
自宅のソファでくつろぎながらこの冊子を手に取った人、色々だと思います。
もうひとつ問いを投げかけてみます。
そんな今のあなたは「何者」なのでしょうか？
多くの人は仕事における肩書や家族関係における立場を思い浮かべたかもしれません。
この問いこそ、「Being Thinking Tour」の核心のひとつだと思うのです。
現代ではあらゆる場所が意味や目的に覆われてしまっていないでしょうか。
学校に行けば生徒と先生という関係があり、
街の中で友達と腰を下ろしておしゃべりをしようと思えばカフェでお客さんにならなければいけません。
知らず知らずのうちにそうやっていつも自分が担う役割を見つけて安心してしまっているのだとしたら、
自分が何者であるかを問うことはきっと新しい感覚を呼び起こしてくれるはずです。

そして、このツアーのキーワードである「ただ、いる」ことを認めてくれる場所とは、
役割を与えない場所でもあります。
あなたはお金を払ってコーヒーを買ったからここにいていいわけでもなく、
「ただ、いる」ことが許されるのです。
そのためには、あらゆる役割や立場が保留にされて、存在そのものが肯定されなくてはいけません。
お気付きかもしれませんが、あなたが「ただ、そこにいる」ためには、
あなたの存在を肯定してくれる他者の存在が必要不可欠になります。
つまり、他者があなたの存在を肯定して「ただ、いる」ことが成立した時、
自分は何者であるかという不断の思考がひらかれるのです。

こうしたぐるぐると巡る問いに向き合うために、福祉施設に滞在することに意味があります。
一般的には特定のニーズを抱えた「利用者」に向けてつくられている福祉施設というものは、
意味や目的に覆われた最たる例のようにも思えます。
しかし、滞在してみると実は自分もここにいても良さそうだという不思議な居心地を感じるはずです。
なぜなら、福祉の根幹には全ての人がより良く生きることを肯定してくれる文化が宿っていることが感じ取れるからです。
そしてそこから新しい問いが次々と生まれていくはずです。
私と支援者と利用者を隔てているものとは一体何なのか、
私がここに「ただ、いる」ことができているように私は他者の存在を肯定できているのか、
自分は何者かという内省的な問いはあっという間に私と他者の間を行き来し、
思考は常に揺さぶられるのです。

きっとこれは福祉施設だからこそ社会へ投げかけることができる、
小さな滞在から生まれる大きな問いかけになるはずです。

青木　彬

福祉施設だからできる、「ただ、いる」こと

ただ、そこにいること。たったそれだけのことなのに、意外と難しい。
「ただ、そこにいろ」と言われているだけなのに、
頭の中でいろんなことを考えてしまうからかもしれません。
そこにいる人たちは、どんな気持ちでそこにいるんだろう。
そこにいる人たちは、なぜここにいて、日々どんな暮らしをしているんだろう。
いや、待てよ？　ただいるってどういうこと？　わかんない！
そう。「わかんない」から盛り上がるのだし、悩むのだし、
仲間が心強く感じられるのだし、だからこそおもしろいんだと思います。
生成ＡＩが、もっともらしい答えを「秒で」用意してくれる時代に、
泥臭く自分の頭で考え、仲間と対話し、ときに自分の弱さもを開示しながら、
答えのない問いを漂流していく。
そんな贅沢な時間は、学校でも会社でも、なかなか作れるものではありません。

ただ、そこにいることは、他者がいると余計に難しくなります。
他者は自分の思い通りにはならない。
ただ、そこにいようとしただけなのに、避けられてしまったり、
嫌な顔をされたり、無視されたりするかもしれない。
自分とは考え方も、価値観も、感じ方、意見も違うから、やっぱり難しいんです。

思えば福祉施設とは、そんな難しいことを、１年３６５日、１日２４時間、
ずっとずっと思考を巡らせ、組み立ててきた場所です。
そこには、めちゃくちゃ興味深い時間や、おもしろい取組みや、
人間の根源に迫る思想や哲学がある。
そう。福祉施設とは、いわば「人間学」のフィールドでもあるのだと思います。
何度か「滞在ツアー」を重ねるうちに、その想いは、より強いものになりつつあります。

だから皆さん、滞在ツアーをやりましょう！　はい、やりましょう！　とはなかなかいきません。
明確な答えや、正しいやり方があるわけではないし、視察とも研修とも実習とも異なるからです。
何かを「する」のではなく、「いる」ことがミッション。
一体なんのためにやるのか、やったらなにが学べるのか、どんなメリットがあるのかわからない。
だからこのツアーは、なかなか広まらないのです。

でもやっぱり思うんです。
人間は「ただ、そこにいる」だけでいい存在だと。
そして、福祉とは、その人の存在を丸ごと、ただ、そこにいるあなたを受け止めてきた場所なのだと。
明確な目的を持ってなにかを「する」以前に、
私たちは、目的を持たずにそこに「いる」存在であること。
まさにその思考の起点に、出発点に、立ち戻ることができるのは、
やっぱり福祉施設だから、なんですよね。

小松　理虔

発　行　　次世代に福祉施設をひらいていくプロジェクト
（社福）東京都社会福祉協議会 総務部 企画担当
（03-3268-7171）
写　真　　加藤　甫/川島 彩永
イラスト　　篠原　奏
文　章　　Beらぼメンバー
BeingThinkingTour2025関係者
発行日　　2026.3

許可のない複製を禁じます

この冊子は、東京都共同募金会の配分金により作成しています